



いよいよ3学期が始まりました。1年のまとめの時期であるとともに、来年度への準備期間であることは、生徒も私たち教職員も同じですね。よりよい北中の学びの在り方を探りながら、今年も授業づくりを進めてまいりたいと思います。どうぞよろしくお願ひいたします。

さて、12/25に大阪府の教育フォーラムがあり、本校にも来ていただいている泰山先生の授業づくりについてのお話を聞く機会がありました。やはり、児童・生徒に委ねる授業への転換には、不安と否定感が伴うことが多い（多くの教師が経験がないから）といとともに、繰り返し、「先生がいないと学べない子ども」か「自分で学ぶことができる子ども」か、目の前の子どもたちにどうなってほしいのか、ということをおっしゃっていました。（実践発表をされた学校の先生も、同じことをおっしゃっていました）

先行き不透明な時代。どんなことがあっても、自分の力で課題を見つけ、クリアするための情報を集め、整理し、乗り越えていける力の土台を、ここ北中でつけてもらいたいなと思いました。

以下には、9月の泰山先生のお話の中にあった、子どもと学習の「型」を共有する話について、簡単にまとめています。少しづつ委ねてみませんか？

委ねてみませんか

学習の「型」を子どもと共有する

9/3提案授業では、子どもたちは様々な工夫を凝らして学んでいましたが、先生から「どう学べばいいか」という学習過程が、子どもたちに十分に共有されていなかった点が課題として挙げされました。

教師は、「学習のてびき」を授業の最初に全体に提示、ゴール（最終的に達成してほしいこと）とルーブリック、そしてプロセス（どう学べば良いか）を明確に示すことが有効であると提案されました。

ゴール（課題設定）とルーブリック（評価基準）の設定

最終ゴール（例：夏休みの思い出を英語で説明できる）を明確にする。

A基準（全員に達成してほしい最低限の基準）と

S基準（英語が得意な子が頑張れば達成できるチャレンジ基準）を設定、生徒と共有します。

プロセスの提示（学びのてびき）

ゴール達成のために、どのような情報（例：過去形、ボキャブラリー）を集め、それをどのように整理（例：思考ツールで）し、どのようにまとめるか、という手順を提示します。

※てびきの活用

最初は教師が示すこの手順通りに学びを進めますが、慣れてきたら、情報収集や整理の仕方など、子どもが自分でプロセスを決められるように、委ねる場所を増やしていきます。

このてびきは、本来教師が指導案で検討している内容と同じですが、指導案が教師だけのものだったために、「先生の指示がないと学べない」という状況を生み出していました。これを子どもと共有することが、自立的な学習者を育む第一歩となります。

課題	この時間の学習課題、めあて、ミッション（言い方は何でも）
Sの基準	クラスで2、3人がクリアできるかどうか、というチャレンジ基準
Aの基準	全員が達成したい基準

教育改革の中心にあるのは、子どもの「自分で学ぶ力」を育てたいという目標。これまでの日本の教育では、先生の能力が高すぎたため、先生の言う通りにすれば知識が身につくという経験を子どもたちが積んできました。その結果、「先生がいないと学べない」という課題が生じています。

自分で学ぶ力を養うには、「ただただ教えられる」のではなく、「1回自分でやってみる」経験が必要です。